

#### 1-4 大正前期の宝石類

現代の日本では、宝石を科学的に分析する「宝石学」は盛んであるが、宝石を歴史的に観察する「宝石史」は、まったくと言っていいほど未発達である。この項は宝石学を学ぶ人たちにも参考にしてほしい。

ここでは、大正前期から後期にかけて用いられた主な宝石類と宝飾素材について取り上げる。

ダイヤモンド、真珠、サンゴ、水晶、めのうについてはすでに説明した。ここではそれら以外について見ていく。

取り上げた宝石を使った製品がカタログや広告にある場合はその図も示す。実際の製品（類似のものを含む）が現存するものについては1-6以下で紹介する。なお、明治から用いられている宝石類や宝飾素材については『日本の宝飾文化史』ですでに説明してあるのと同書も参考のこと。

#### ルビー、合成ルビー、サファイヤ

ルビーは明治時代からダイヤモンドに次いで人気の高い宝石。すでに明治二十〜三十年代には有力宝石商で取り扱っている。大正時代以降もその人気は継続していたが、天然のルビーは少なく、多くは合成石（当時は合成宝石と呼んだ）だった。

例えば、大正四年に刊行された『天賞堂営業案内―貴金属装身具之部』（第八版）を見るとダイヤモンドや真珠の指輪とともに18金製ルビーの指輪がいくつも紹介されている（図1-4-1）。

このカタログによると（C17）の大きめのルビーの指輪が12円なのに対し、ルビーより小さめのダイヤの指輪が150円と出ている。だがルビーは当時も高価な宝石であり、ルビーとダイヤにこれほどの価格差があったとは考えにくい。価格の点から見るとこれらは合成ルビーであった可能性が高い。



図 1-4-3  
白サファイヤの指輪  
天賞堂  
大正 4 年 4 月『天賞堂営業  
案内—貴金属装身具之部』  
より



図 1-4-2  
色サファイヤの指輪  
天賞堂  
大正 4 年 4 月『天賞堂営業  
案内—貴金属装身具之部』  
より

赤色以外のコランダム（鋼玉石）はすべてサファイヤ（当時は「サ  
フヤ」とも表記）というが、サファイヤには青い色（ブルーサファ  
イヤ）の他にいろいろな色があった。  
（C 38）の「色サフヤ」（12 円）は、おそらくブルーサファイヤ  
と思われる（図 1-4-2）。（C 48）の「白サフヤ」とは無色のサフ  
アイヤ（図 1-4-3）。当時、無色のサファイヤはダイヤモンドの代  
替品として使われることが多かったので、これもそのように使われ  
たのだろう。  
これらのサファイヤが天然石なのか合成石なのかは定かでないが、  
サファイヤはルビーに比較して大きな石の産出が多く価格も安かつ  
た（『寶石學』）。従ってこのサファイヤは天然石だったと思われる。



図 1-4-1  
ルビーと表示された指輪  
天賞堂  
大正 4 年 4 月『天賞堂営業案  
内—貴金属装身具之部』より

## エメラルド

エメラルド(「エムロ」とも呼ばれた)も明治後期から日本に入ってきている宝石。大正時代に入っても丸嘉や白牡丹本店などの有力宝飾店では、ダイヤとともに高級宝石として積極的に取り扱っていた(図1-4-4)。

しかし、大きな石は少なく、また品質のバラつきが大きく、価格にも幅があった。『寶石誌』では大正5年時点で1カラット25円〜500円と大きく差があった、高品質のものはダイヤモンドと同じ、もしくはダイヤモンド以上の価値があったと記している。『宝石百年』によると当時、天然色石は東洋の宝石商によって日本に持ち込まれたが、エメラルドの良質なものの多くは欧米に輸出されて、日本にはあまり来なかった。あったとしても色が濃く、深みを欠いた白濁の品が多かったという。

ある程度の品質のエメラルドが比較的多く輸入され、装身具に使われるようになるのは昭和初期になってからである。



図 1-4-4  
ダイヤとエメラルド指輪広告  
白牡丹本店  
大正2年9月『婦人世界』

## (コラム1-13)

### 大正初期のルビー、エメラルド事情

この時代のルビーとエメラルドにつき、三越では自店の製品目録で宝石指輪について次のように説明している。

「寶石はダイヤモンドが多く、之については眞珠であります(中略)「ダイヤ、眞珠に次いでルビーであります。ルビーも大分等級がございますので、其上等なるものは、中々の高價なものもございますが、イミテーション



図 1-4-5  
アクアマリン指輪広告  
丸屋商店  
大正 4 年 11 月『婦人世界』より

**アクアマリン**  
エメラルドと同じベリル族の宝石であるアクアマリンの製品も少量ではあるが、すでに日本で売られていた(図 1-4-5)。ただし、エメラルドと比べると価格は安く、1カラットで2円ないし30円ぐらいだった(『寶石誌』)。

この模造エメラルドは大正七、八年の頃には国内でも作られるようになり、原価の四十倍という法外な値で売られていたという『宝石百年』。こうした模造品が多かったことも天然のエメラルドがあまり普及しなかった理由かもしれない。

だが、方形の小さな角形カットのエメラルド(カリブル)は割合豊富で、この石を使った指輪などは少なくなかった。

### 模造エメラルド

大正五年頃には、上部は天然エメラルドだが下部は緑色のガラスという貼り合わせ(ダブレット)の模造石も国内に入っていた(『寶石誌』)。

ン(模造品)の技術の進歩に随ひ、大部分イミテーションを用ゐて居る場合もあります。この目録に圖解せられたる指輪には、佛國製のイミテーションを用ゐます。エメラルドも結構なるものなれども、品物が佛底でございませ故、皆様の需要に應ずることの出来ないのは遺憾至極であります(大正二年『三越タイムス』第十一卷第九号臨時増刊附録)。

良心的な説明である。このコメントによりルビー、エメラルドは、三越ですら天然石でないものを用いていたことが分かる。だがここでは模造品(模造石)と合成石との区別がされていない。ルビーが模造石となっているが、これは合成石だろう。

## オパール

オパールも日本人が大変に好んだ色石（当時は「オツパール」と原語発音に近く表記されることも多かった）。すでに明治三十年前後から普及し始め、大正（昭和初期と盛んに用いられた（[図1-4-6](#)））。明治四十年頃には国産（福島県の宝坂産）のオパールを販売する東京宝石株式会社という会社もあつた。

明治期には一部スロバキア産の通称ハンガリアン・オパールもあつたが、大正期のものはほぼすべてオーストラリア産で乳白色のものであつた。

オパールはヨーロッパでは一時、不吉をもたらす石ともいわれたが、日本ではそういつた影響はまったくなく、比較的安価であつたこともあり「下町階級の人々の間にまでこのオパールが大いに愛好されて、数量的にいつてもこの石ほどに普及されたものはなかつた」。だが「不透明、乳白色のものが多いために、人気を失つて（中略）昭和初期にメキシコ産のすばらしい石が来るまで、オパールの人気は中々回復しなかつた」（『宝石百年』）。

オーストラリアからどのようなように日本に運ばれたか。その多くは正規の輸入ではなく、船員が大きな原石の塊を持ち込んでいたといわれる。

たくさん用いられたはずだが、破損しやすい宝石であるためか、今日に残っているものはそれほど多くはない。



図 1-4-6

オパール指環

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂営業

案内—貴金属装身具之部』

より

## ヒスイ

ヒスイ（ジェダイト—硬玉）は誤解されることが多い宝石である。

古代に勾玉などに使われたヒスイが再び登場するのは明治四十年前



図 1-4-8

ヒスイ指輪

天賞堂

大正4年4月『天賞堂  
営業案内—貴金属装  
身具之部』

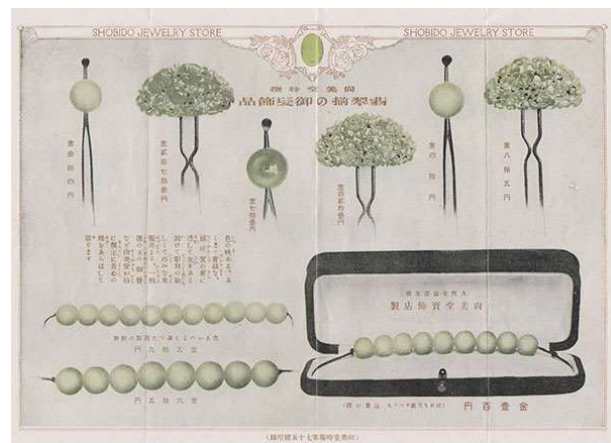


図 1-4-7

ヒスイ髪飾り

尚美堂

大正6年3月『尚美堂時報』第75号付録より  
玉簪、束髪簪、根掛。

後から。最初は玉簪や根掛<sup>ねがけ</sup>（日本髪を束ねたところに掛ける飾り）に用いられた。

大正期になるとヒスイ人気は増々高まり、サンゴ人気を凌ぐほどだった。ヒスイは玉簪に、根掛の玉に、帯留に、そしてこの時代に発達した束髪用の簪に盛んに用いられた（図1-4-7）。また、良質なものは指輪にも用いられた（図1-4-8）。

しかし、大正時代のヒスイは現在の私たちが思い浮かべる冴えたグリーン<sup>ろうかん</sup>の琅玕質<sup>ろうかん</sup>のものはごく一部で、多くは「緑又は白又は白地に緑を交えたもの」だった（『日本囊物史』）。琅玕質のヒスイが流行の主流になるのは昭和初期からである。

なお、明治時代の彫刻の帯留は、清朝（中国）の貴族が使っていた装身具をそのまま帯留に転用していたが、大正期頃からは日本人が彫刻したものを徐々に用いるようになった。

## コハク

日本でコハクの玉簪が用いられたのは明治十年ごろからである。大正期にはコハクは主に帯留に用いられた。

産地としてはバルト海沿岸地域が有名だが、久慈（岩手県）のコハクも江戸時代からくんのこ薫陸という名称で知られていた。だが大正頃には装身具に使えるほど良質のものは産出しなかった（『寶石誌』）。従って当時のコハクはすべて輸入品と考えていいだろう。

## トパーズ（おうぎよく黄玉）

トパーズは日本でも明治前期から滋賀県や岐阜県から産出。しかし黄色は稀で無色、淡青、淡紅などが多く、無色のものはブリリアントカットに研磨されダイヤモンドの代用品とされた。大正時代には、11月の誕生石として外国産の黄色のものが用いられた。紅色のものは高価だったが、無色または濃黄色のものは**安価**で1カラット5円は超えない（『寶石誌』）。

## ガーネット（しほくめいし柘榴石）

ガーネットにはいろいろな色があるが、明治時代から日本人が好んだのは赤色の宝石で、良質なガーネットは、しばしばルビーとして売られた。

大正時代以降も1月の誕生石として使われたが、濃血赤色の、あまり美しくないガーネットも多く、これらはかなり**安価**だった（『寶石誌』）。

## べっ甲、擬甲

この時代にはべっ甲の他、「しほうば四方張り」と呼ばれた張りべっ甲、「**ゴム**」と呼ばれたセルロイドが装身具に用いられた（**図1-4-9**）。

べっ甲は、櫛、筭、簪に江戸時代中期の今から約300年前から使われている伝統的宝飾素材。大正時代になっても、べっ甲による

櫛、簪、帯留などの和装の装身具や束髪用の櫛や簪がたくさん作られ、その流行は昭和初期まで続いた。

四方張とは馬や牛の蹄めいひでべっ甲の表面を包んだ張りべっ甲のこと。また、卵白を型に入れて擬甲させ周囲に牛爪を薄く貼り合わせた「卵甲」らんこうも使われた。その他、「ゴム」と呼ばれた「セルロイド」も盛んに使われた（セルロイドについては後述）。



図1-4-9

べっ甲、四方張、卵甲、ゴムの髪飾り（婚礼用）

いせ竹小間物店

大正5年12月「演芸画報」

べっ甲製 80円より、四方張製 22円より、卵甲製 12円より、ゴム製 4円50銭よりと**素材により値段が大幅に違う。**

## 象牙

象牙は古くからの宝飾素材で江戸後期（今から約200年前）から使われている日本人お気に入り素材。大正期になっても根強い人気があり、さまざまに彫刻したものが主に帯留に用いられた。セルロイド製の模造象牙櫛も多かった。

## ムーンストーン（月長石）

ムーンストーンは日本では明治中期から用いられた宝石。大正時代にも指輪などに使われ、『寶石誌』によると、優良品でもカラットあたり「六円乃至十円」と比較的安価。この宝石はカボションや球状に研磨すると真珠のような光沢を見せる。そのため真珠と共に6月の誕生石とされている（三越の「十二ヶ月指輪」では8月の誕生石となっている）。

## トルコ石 (土耳其石)

トルコ石 (ターコイズ) の石名は、イラン産のトルコ石がトルコ経由でヨーロッパに入ったことに由来。

大正時代には12月の誕生石として日本にも入っていたようだが「土耳其 (古) 玉は皆小にして貴し、従て之を偽造する」ことが多かった (『寶石誌』)。

当時の模造石で多かったものは骨や牙の化石を着色したものでフランスで作られたボーン・ターコイズ (和名は「骨トルコ石」「歯トルコ石」)。

おそらく日本で大正前期に用いられたトルコ石の多くもこれに類する模造石だったと思われる。

## キャッツアイ

キャッツアイと表記された宝石は明治二十九年の天賞堂広告に初めて見える宝石だが、尚美堂も大正初期に扱っていて価格は10円とある (図1-4-10)。

クリソベリル・キャッツアイなのだろうが、『寶石誌』によると、日本の上流社会でも貴重視され、透明の良品なら、1カラット200円以上するというから、ここに出ている10円というのはいかにも安い。たとえこの石がクリソベリル・キャッツアイだとしても、品質は良くなかったと考えてよさそうだ。



図 1-4-10

キャッツアイ指環

尚美堂

大正2年1月『尚美堂新品録』より

## 橄欖石 (ペリドート)

ヨーロッパでは盛んに用いられた宝石で、日本でも第一次大戦後は「西比利亞方面シベリアから多量の優良石の輸入があつて、指環、帶止等に嵌は入せられて市中の宝石店の軒頭に現はる事が多くなつて居た」。ただし、実際に検査をすると真の橄欖石に属するものは比較的少数であつたという（『寶石學』）。

当時は濃緑色を帯びるものをペリドート、黄緑色のものをオリヴィン（オリビン）、淡黄緑ないし黄金色のものをクリソライトと称した。

### 玉髓（カルセドニー）

不透明な潜晶質石英の総称で半透明石として産出。日本でも各地で産出し、島根県の出雲地方からは濃緑色の碧玉「出雲石」（「青めのう」とも呼ばれる）が産する他、佐渡（新潟県）の赤玉石などがある。玉髓の多くは安価な帶留などの石として用いられた。

### ブラッドストーン（けっせき血石）

ブラッドストーンは明治時代から男性用指輪に用いられた宝石で、濃緑色のジャスパー（不透明潜晶質石英）の地に血赤色の小斑点はんがある。

大正時代には3月の誕生石として主に安価な指輪に用いられた。

### クリソフレーズ（人工着色カルセドニー）

クリソフレーズ（Chrysoptase—天然カルセドニー）なら聞いたことがあつても「クリソフレーズ（Chrysoptase）」というのは初めてという人も多いだろう。

クリソフレーズとはクロムの化合物で緑色に着色したカルセドニーで略して「クリソ」とも呼ばれる一種の模造石。生産地はドイツで、大正四〜九年頃日本で流行した。

図1-4-11はその広告。だが「クリソプラス」となっている。クリソフレーズの英語を日本語読みしたのでこう表記したのであろう。



図 1-4-12

ピーシー広告

万久商店

大正 7 年 7 月『新演芸』

原石でも輸入され、国内加工品の他、  
中国で加工されたものもあった。

ピーシー(ピンク・トルマリン)  
ピーシーとは中国名の璧璽、碧晒(または碧沙)に由来するピン  
ク・トルマリンないし、レッド・トルマリン(ルベライト)のこと  
『寶石誌』『寶石學』他。  
この宝石は大正五年頃には日本へもたらされ、ピーシーの名称で、  
昭和の戦後まで使われた。紅色のピンク・トルマリンはこれまでの  
日本には見られなかった石で、若い女性を中心に簪の玉や帯留の石  
として流行した(図 1-4-11)。



図 1-4-11

クリソプラス(クリソフレーズ) 帯留  
広告

丸屋商店

大正 4 年 11 月『婦人画報』より

クリソフレーズは昭和七年頃には良質なものが甲府でも作られて  
いる(『水晶宝飾史』)。

### 孔雀石（マラカイト）

孔雀石は濃淡のある緑色の縞目状の鉱物で、国内でも産出する。明治時代中期から丸玉にして玉簪に用いられていた。大正時代にも同様に玉簪の玉として用いられていたようだ。また大正時代には彫刻を施して帯留にも使われたようだが、欠けやすいためか現在に伝わる帯留は少ない。

### クリソコーラ（珪孔雀石）

クリソコーラは青く青緑色の珪酸銅の鉱物で、マラカイトに一见似るために和名を珪孔雀石という。大正八年頃には「クリスココーラ」と称して束髪櫛や帯留に彫刻したものが用いられた（図1-4-13）。『寶石學』にも「往々各種の装飾品に彫刻せらる」とある。

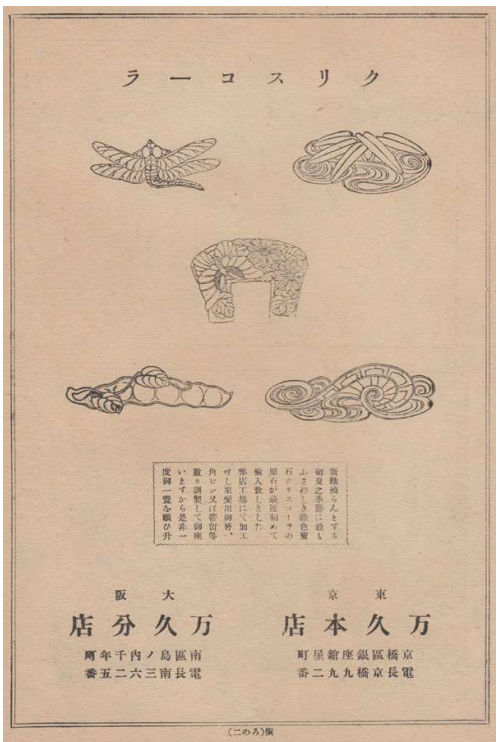


図 1-4-13  
クリソコーラ広告  
万久本店、分店  
大正8年6月『演芸画報』

### セルロイド

セルロイドとはニトロセルロースに、加工し易くするために可塑かそ剤として樟腦しょうのうを混ぜた半透明のプラスチック（合成樹脂）。

明治時代から「護謨ゴモ」と呼ばれ、べっ甲色に着色したものはべっ甲代用品として、象牙色に着色したものは象牙代用品として用いら

れた。なぜセルロイドが護謨と呼ばれたかという点、明治初期に初めて輸入された時にセルロイドをゴムと勘違いしたこと由来するといわれる。

大正時代になっても、護謨ゴムという呼び名も残ってはいたが、徐々に「セルロイド」という言葉が一般化した。櫛や束髪髪飾りなど、安価な髪飾りなどに以前にも増して用いられた。特にべつ甲を模した櫛が多く、安いものならセルロイドという認識も広まった。

### 模造ダイヤ、模造宝石

セルロイド櫛の上部などには当時「新ダイヤ」と呼ばれたガラス製の模造ダイヤが使われた(図1-2-4参照)。

模造ダイヤは明治時代から装身具に用いられていたが、盛んになったのは大正前期から。新聞記事に「何といっても櫛も簪も新ダイヤ一方で持切りの有様です。技巧が段々と上手になって光りも本物と變らぬやうに出来ます。小間物類で何が一番流行するかといへば全く此新ダイヤです」(大正三年8月『都新聞』)とある。また同新聞には「又近来はルビーやサファイアの擬ひものが非常な勢を以て流行しました」とガラスの模造宝石の流行についても言及している。ガラスには何種類があるが、もつとも多く用いられたのは、通常のガラスよりも屈折率の高い、すなわち輝きの大きい鉛ガラス(フリントガラス)である(『人造品及模造品の研究』<sup>58</sup>)。ガラスに各種の金属酸化物を化合すると模造ルビー、模造サファイヤ、模造エメラルドが製造できる。

模造ダイヤ他や色ガラス模造宝石は安価な装身具用素材として大正後期から戦時体制期まで使われ続けた。

### 七宝

七宝も見方によっては宝石類の一種と考えられる。

七宝とは銀や銅などの面に窪みを作り、そこにガラス質の色釉薬を埋めて熱し、溶着させて種々の色模様を出す技法(七宝焼)、及びその技法で作ったもの。模様の輪郭に針金を用いたもの(有線七宝)と用いないもの(無線七宝)とがあり、簪の玉などとして江戸末期から明治初期には装身具も用いられた。

有力宝飾店の御木本真珠店では、大正三年に七宝を洋風装身具な

どに使っている（「銚のあゆみ(4)」）。

また大正前期には、透明な色釉薬を使ったステンドグラス風の透胎七宝（透明七宝ともいう）もあり（『日本囊物史』、束髪簪などに応用された）。

以上がすべてではないが―大正前期から使われ始めたダイヤモンドや伝統的宝石以外の宝石類である。8月の誕生石を使ったサードニクス（紅縞瑠璃）を使った製品や12月の誕生石であるラピス・ラズリ（瑠璃）の製品などはまだ見られない。

時代が時代なので、合成宝石や模造石が混じってはいるが、日本人が愛でた宝石類や宝飾素材は今日思われている以上に多様・多彩であったことが分かると思う。

1-4の最後に、ここではしばしば参考文献として取り上げてきた鈴木敏編『寶石誌』（図1-4-14）を紹介しておく。この本は明治二十二年に、日本最初の宝石専門書『寶玉誌』を出した鉱物学者・和田維四郎の弟子である鈴木敏（地質学）によって大正五年にまとめられたもの。

その序文に次のようにある。「我國に寶石産出の少なきを恨事とするも、近年寶飾用として外國より寶石の輸入日を逐ふて盛なるには拘はらず、未だ邦文にて寶石を誌せし著書なきを遺憾とし、本年先生の還暦を祝せんが為、其記念として体裁を先生の寶玉誌に倣い、本書を編著し、宝石愛好家の一助とすべく本書を公にした。

大正前期の宝石事情を知るための必須の一冊といえよう（昭和四十九年には思文閣から復刻版も出ている）。

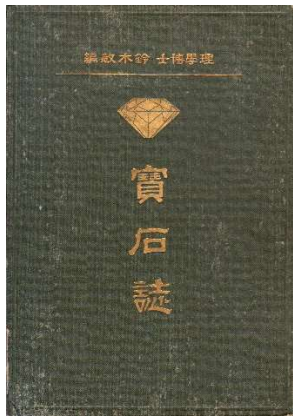


図 1-4-14  
鈴木敏編『寶石誌』